

第1章 はじめに

1.1 本研究の位置づけと目的

最近2・30年間の言語研究は、統語論中心から意味論中心へと、その関心が大きく移ってきたように思われる。それは、これまで統語論で議論されてきた様々な言語現象を意味論的に説明する必要が生じたからだと考えられる。その中でも特に、動詞の統語構造の特性をその語彙的意味に求める語彙意味論 (lexical semantics) と、語彙と統語構造の間に厳密な区別を想定せず「構文」自体が独自の意味を持つと捉える構文文法 (construction grammar) の研究が活発である。そして近年では、これまでの諸研究で提示されてきた様々な理論的仮説や認知的解釈を実際の言語使用のデータで検証しつつ、言語が実際どのように使われているのかに焦点を当てるコーパス言語学 (corpus linguistics) が非常に注目を集めている (Langacker (2000): a dynamic usage-based model¹)。

言語使用の実態分析に関する重要性が高まった背景には、言語表現 (の意味) は話者が表現対象をどのように捉えるかによって決定される (主体性; subjectivity) という認知文法の考え方が大きく影響している。またそれは、パソコンとインターネットの普及やコーパス構築の進歩という時代的背景によってもたらされた言語研究の新たな方向性によるものとも言える (そういった意味で Leech (1992)は、最近のコーパス言語学を、コンピュータがない時代のそれと区別して、コンピュータコーパス言語学 (computer corpus linguistics: CCL) と呼んでいる)。言語情報学 (linguistic informatics) という新たな学問分野が確立しつつある近年、² コーパス分析の研究成果やその応用がますます期待されている。だが、言語研究におけるコーパスの具体的な活用方法については必ずしもまだ十分に確立されているとは言えず、方法論そのものに関する研究も俟たれている。

本研究は、以上のような言語研究の流れにおける時代的なニーズに対応したもので、ドイツ語動詞の言語運用上の実態を分析することを基本理念としている。従来の研究が、サンプル例を用いて主に言語現象の規則性の解明に取り組んでいたのに対し、言語運用分析は、コーパスを用いてその言語現象が実際の使用の場において具体的にどのように実現されているのかを明らかにすることを目指す。

たとえば、従来の動詞の分析は、結合価理論に基づき、主に補足成分との結びつきを中心になされていたが、最近では、補足成分・添加成分の区別ではなく、それぞれの動詞が

¹ これを坪井 (2000) は「動的使用依拠モデル」と訳している。

² 東京外国語大学 21 世紀 COE プロジェクト「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」 (<http://www.coelang.tufs.ac.jp>) も参照。

言語使用上どのような語結合で用いられているのか、また具体的にどのような意味内容で用いられているのかを、頻度的観点から記述する必要性が議論されている（たとえば、「動詞頻度辞典（仮）」³）。それは、言語の使用は社会的・文化的活動であり、言語の本質はその使用の実態から探ることができるという考え方に基づいたものであると言える。

その新しい試みの一環として、本研究では、「状態変化動詞」を取り上げる。「状態変化動詞」は、アスペクト、統語的交替現象（使役交替・位置交替）、中間構文、結果構文など、様々なテーマに関連して幅広く取り扱われている。

谷口（2004: 57）は、認知言語学において、主語のプロトタイプは動作主（agent）、目的語のプロトタイプは移動物（mover）あるいは被動作者（patient）と想定されることに関連して、『「誰かの行為によって、あるものの位置あるいは状態の変化が生じる」という動態的事態が、人間にとって最も基本的場面の1つであるためであろう』と述べている。Goldberg（1995: 39）も、「構文は人間の経験において基本的な事態を表すもの（scene encoding hypothesis）」と仮定し、基本的な事態タイプとして「状態変化」「移動」などを挙げている。

こうしたことから、「状態変化」は現実世界の出来事を概念化する上で重要な位置を占めていると言え、そういう意味でも「状態変化動詞」の分析は有意義であると考えられる。しかし、ドイツ語の「状態変化動詞」そのものを体系的に分析した研究は見当たらず、また状態変化動詞の実際の使用に関する研究も不十分である。⁴

本研究の目的は、「状態変化」という現象に関して、ドイツ語がどのような語彙的体系——すなわち、どのような意味内容の、どのような語彙をどのような対立を持たせて——を形成しているのか、またそれぞれの語彙を実際どう使用しているのかを、「使役交替」という文法現象を軸に、コーパスを用いて具体的に記述することにある。

どの言語の場合でも表現対象とする現実世界は同一であり、事柄の意味特性やそれに基づく認識パターンにも普遍性が認められるかもしれない。⁵ しかし、それらをどのように言語化するか、言い換えると、同一である現実世界の出来事を具体的にどのような語彙的体系で表現するのか、またそれらを実際どのように用いるのかに関しては、言語ごとの独自性があると考えられる。そこに、個別言語ドイツ語における動詞（本研究では「状態変化動詞」）の語彙化およびその使用実態を分析する意義があると言える。

³ 「動詞頻度辞典（仮）」に関しては、東京外国語大学大学院の在間進教授のゼミで議論されているが、具体的な研究成果はまだ出ていない。

⁴ 英語の「状態変化動詞」に関しては、Levin & Rappaport Hovav を中心とする一連の研究がある。それらについては、第2章で詳しく取り上げる。

⁵ 概念化能力（conceptualizing capacities）は普遍的であるが、それによって形成される概念体系（conceptual systems）は言語によって異なるとされている（Lakoff 1987: 304ff.; 児玉 1995: 25f. を参照）。

1.2 研究対象と問題提起

「状態変化動詞」は、様々な研究分野に関連して取り上げられてきたが、特に動詞の語彙的意味と統語構造との相関関係を論ずる語彙意味論的アプローチの中で、とりわけ「使役交替」という統語的交替現象をめぐって議論されている (Fillmore 1970; Haspelmath 1993; Härtl 2003; Levin 1993; Levin & Rappaport Hovav 1995, Rappaport Hovav & Levin 1998; McKoon & Macfarland 2000; Pinon 2001; Voorst 1995; Wright 2001 など)。

ドイツ語の状態変化動詞には、たとえば次のようなものがある。

- (1) a. Er brach den Ast in zwei Teile. (彼は枝を二つに折った)
 b. Die Äste brachen. (枝が折れた)
- (2) a. Er bog den Ast. (彼は枝を曲げた)
 b. Die Äste bogen sich. (枝が曲がった)

上例ではいずれも、「枝」に何らかの状態変化が生じることが表されているが、その具体的な意味内容——すなわち、「枝」の元々の状態から「折れた」または「曲がった」状態への変化——は、それぞれの文の動詞 *brechen* 「折る／折れる」、*biegen* 「曲げる／曲がる」によって示されている。

本研究では、このような、その意味が実現されることによってある対象に特定の状態変化が生じることを表す動詞（すなわち「状態変化動詞」）に基づく「語彙的状态変化表現」を扱う。⁶

ドイツ語の状態変化動詞は、動詞の自他が形態的に区別される日本語とは違って（上例の日本語訳を参照）、同形で他動詞的（使役的）にも自動詞的（非使役的）にも用いられることが知られている。(1)(2)において動詞 *brechen*, *biegen* は、それぞれの a では使役的に、b では非使役的に用いられ、「枝」に生じる状態変化の出来事に関して、〈使役的表現〉と〈非使役的表現〉を形成している。⁷ これらの〈使役的表現〉と〈非使役的表現〉は、後

⁶ ドイツ語の状態変化表現には、状態変化動詞による場合以外に、動詞と結果挙述語句の組み合わせによる場合（たとえば、*Der Wein ist zu Essig geworden.* ワインが酢になってしまった）や、結果構文の統語構造による場合（たとえば、*Das Baby weint das Kissen nass.* 赤ん坊は泣いて枕をぬらす）もある（特に後者の場合をここでは「統語的状态変化表現」と呼んでおく）。本研究では、主に使役交替の観点から分析を行うため、研究対象を「状態変化動詞」に基づく「語彙的状态変化表現」に限定する。

⁷ 「使役的表現」は状態変化を惹起する使役主が文中に現れる（受動文も含めて）「他動詞用法」と同じ概念で、「非使役的表現」は使役主が文中に現れない（あるいは想定できない）「自

者が示す結果的意味内容が前者に内包されるという意味関係を保ったまま,⁸ 同じ事柄表現における「使役主の表示の有無」という点でのみ対応している。⁹

このように、1つの動詞が表すある事柄表現において「使役主の着脱」——使役主を付け加えて〈使役的表現〉を形成したり、使役主を取り外して〈非使役的表現〉を形成したりする操作——が可能で、その際、〈使役的表現（他動詞用法）〉の目的語（以降〈他目〉と呼ぶ）と〈非使役的表現（自動詞用法及び再帰用法）〉の主語（以降、それぞれ〈自主〉〈再主〉と呼ぶ）が同じ指示対象を表す文法現象を「使役起動交替（causative-inchoative alternation）」あるいは単に「使役交替（causative alternation）」と言う。¹⁰

「状態変化」という事柄には、その事柄上の特性から、結果として生じる「対象の状態変化」そのものに先行して、「対象に対する使役的働きかけ（あるいは原因となる事柄）」が存在すると想定される。「状態変化」の事柄に認められるこのような複合的事象性から、「状態変化動詞」は、(1)(2)の a のような〈使役的状态変化表現（XがYの状態を変化させる）〉と(1)(2)の b のような〈非使役的状态変化表現（Yの状態が変化する）〉の両方に用いられると考えられる。そのため、使役交替を示すことは「状態変化動詞」の統語的特性の1つとして見なされてきた（Levin 1993; Levin & Rappaport Hovav 1995; Rappaport Hovav & Levin 1998）。

しかし、ドイツ語の状態変化動詞の中には使役交替が成立しないもの——すなわち、使役的用法のみのものや非使役的用法のみのもの——も存在する。たとえば、次のようなものが挙げられる。

- (3) a. Sie sprengten die Brücke. (彼らは橋を爆破した)
 b. *Die Brücke sprengte [sich].¹¹

動詞用法」および「再帰用法」の両方を含む概念で用いる。そのため、ここでいう「使役（Kausativ）」は、lassen 構文「～させる」による使役とは区別される（中右・西村（1998: 120f.）を参照）。

⁸ Levin & Rappaport Hovav (1995: 117)にも次のように述べられている。

With a causative alternation verb, the causative use entails the noncausative use, so that if someone breaks something, then that thing breaks.

⁹ ここで「事柄」という用語は、動詞の自他や名詞の格に拘らず、「動詞+名詞（状態変化の担い手）」の組み合わせが表す出来事の単位を指すのに用いる。たとえば、「枝が折れる」も「枝を折る」も、枝の形状の変化を表すという意味で、同じ「事柄」を表すと見なす。

¹⁰ ドイツ語の使役交替の場合、〈使役的表現〉に対応する〈非使役的表現〉が(1b)のように自動詞構文で表されるパターンと(2b)のように再帰構文で表されるパターンがある（大矢 1996, 1997; 成田 1999; カン 2001 など参照）。なお、前者に当てはまる動詞を《他自動詞》、後者に当てはまる動詞を《他再動詞》と呼ぶ（これらの用語の由来については、第3章の注34を参照）。

¹¹ [sich]は、当該の文が sich を伴わない自動詞構文と sich を伴う再帰構文のいずれにおいても容認されないことを示す。

- (4) a. *Er platzte den Ballon mit lautem Knall.
 b. Der Ballon platzte mit lautem Knall.
 (ゴム風船が大きな音を立てて破裂した)

上例(3)(4)でも、(1)(2)と同様に、対象に物理的な形状の変化が生じたことが表されている。しかし、ここに用いられている動詞の場合、使役交替は起こらない。すなわち、(3)の *sprengen* 「爆破する」は、使役的用法のみが可能で、(4)の *platzen* 「破裂する」は、非使役的用法のみが可能である。対象にもたらされる「状態変化」の結果は同類のものであっても、それがどのような動詞によって表されるかによって、表現形式の可能性には相違が生じるのである。それでは、使役交替が起こらず、使役的用法でのみ用いられる状態変化動詞や、非使役的用法でのみ用いられる状態変化動詞には、それぞれどのようなものがあるのだろうか。また、それらの動詞には、それぞれどのような意味的特性が認められるのだろうか。

さらに、使役的用法と非使役的用法を併せ持つ動詞（すなわち「使役交替動詞」）の場合でも、結合する名詞の種類によっては、使役的用法のみが可能なものや非使役的用法のみが可能なものがある。

- (5) a. Er brach sein Versprechen. (彼は約束を破った) 参照：(1)
 b. *Das Versprechen brach.
 (6) a. *Er bog die Tische. 参照：(2)
 b. Die Tische bogen sich. (テーブルが曲がった (たわんだ))

(1)(2)に示した通り、動詞 *brechen*, *biegen* は使役的用法と非使役的用法を併せ持つ使役交替動詞である。しかし、これらの動詞においても、(1)の a, b および(2)の a, b に見られるような、〈使役的表現〉と〈非使役的表現〉の対応関係が常に成立するとは限らない。

(1)と(5)を照らし合わせてみると、動詞 *brechen* は、「枝が折れる」という具体物の形状の変化を表す場合、使役的用法でも非使役的用法でも用いられうるが、「約束が破られる」という抽象物の変化を表す場合、使役的用法でしか用いられないのである。しかしこのような使役交替が制限される現象は、抽象名詞と結びついたメタファー的用法において非使役的用法が制限される場合に限られるものではない。

(2)と(6)を照らし合わせてみると、動詞 *biegen* は、「枝が曲がる」という出来事の場合、使役的用法でも非使役的用法でも用いられうるが、「机が曲がる (たわむ)」という出来事の場合、非使役的用法でしか用いられないのである。特にこれは、同じ意味用法（「具体物を曲げる／具体物が曲がる」）の例においても、名詞の種類によって、許される統語形式に相違があることを示しているという点で興味深い。

動詞の意味用法が同じでも、使役交替が成立する事柄と成立しない事柄があるということは、たとえば「何が *biegen* するのか」というように、状態変化の対象を表す名詞句の意味内容によって、事柄の性質が異なる、もしくは少なくともドイツ語において事柄の捉え方が異なることを示唆しているものと考えられる。

このように、使役交替を示す動詞においても、使役的用法と非使役的用法が同じ指示対象の〈使役的状态変化表現〉と〈非使役的状态変化表現〉として対応できない場合がある。それでは、どのような名詞の場合に使役交替が成立し、どのような名詞の場合に成立しないのだろうか。また、使役交替が制限される名詞、さらには名詞と動詞の組み合わせが表す事柄には、どのような意味的特性が認められるのだろうか。

以上を整理すると、本研究の問題提起は、以下のようにまとめられる：¹²

[1] 使役交替する動詞としない動詞

使役交替が成立する状態変化動詞にはどのようなものがあるのか。また、使役交替が成立しない状態変化動詞、すなわち、(a) 使役的用法のみ可能なものと、(b) 非使役的用法のみ可能なものにはそれぞれどのようなものがあるのか。

[2] 使役交替しない動詞の意味特性

使役交替が成立しない状態変化動詞、すなわち、(a) 使役的用法のみ可能なものと、(b) 非使役的用法のみ可能なものにはそれぞれどのような意味的特性が認められるのか。

[3-1] 使役交替する動詞において、使役交替が可能な場合と不可能な場合

各使役交替動詞の用法の中で、コーパスの事例として、使役交替が成立するのはどのような名詞と結合した場合なのか。また、結合する名詞の種類によって使役交替が成立しない場合、すなわち、(a) 使役的用法のみ可能な場合と、(b) 非使役的用法のみ可能な場合にはそれぞれどのような動詞と名詞の組み合わせがあるのか。

[3-2] 使役交替する動詞において、使役交替が不可能な場合の意味特性

結合する名詞の種類によって使役交替が成立しない場合、すなわち、(a) 使役的用法のみ可能な場合と、(b) 非使役的用法のみ可能な場合には、それぞれどのような意味的特性が認められるのか。

[4] 語彙（動詞）レベルと事柄（動詞+名詞）レベルにおける意味的共通性

[2] (a) と [3-2] (a)、および [2] (b) と [3-2] (b) の間には、それぞれ意味的共通性が認められるのか。

¹² 問題提起を含む本研究の全体像については12頁の図も合わせて参照されたい。

以上のような問題提起を手がかりに、本研究では、ドイツ語の「状態変化動詞」が、「使役交替」をめぐる、語彙および文形成においてどのような体系（相互関係）を形成しているのか、その全体像を捉える。特に、状態変化動詞のコーパス分析を通して、ドイツ語における「状態変化表現」が実際の言語運用の場においてどのように展開されているのか、その実態を捉えることに主眼を置く。次節では、その方法論について述べる。

1.3 方法論

かつての生成文法は、統語構造と語彙的意味はそれぞれ独立的であるという仮定に立っていたが、最近の語彙意味論は、その仮定を批判し、統語構造と語彙的意味は密接に関連していると主張する。

このアプローチでは、動詞のどの部分が統語構造を決定しているのかという問題が議論されており、それに関しては、動詞の意味を2つの部分——項の決定に重要な役割を担う構造的 (structural) な部分と、項の決定に重要ではない個別的 (idiosyncratic) な部分——に分けて捉える見方が広く支持されている。

たとえば、述語分解 (predicate decomposition) の形式を用いた動詞の意味記述では、「基本述語 (primitive predicates) (のコンビネーション)」が動詞の構造的な部分を示し、「定項 (constants)」が動詞の個別的な部分を示す (Jackendoff 1990, Pinker 1989, Levin & Rappaport Hovav 1995, Rappaport Hovav & Levin 1998)。Gerling/Orthen (1979)は、動詞の意味特徴を、結合価に関係する部分 (valenz-relevante inhärente semantische Merkmale: Funktor) とそうでない部分 (valenz-irrelevante inhärente semantische Merkmale: Modifikator) に分けており、Grimshaw (2005)は、動詞の意味における「意味構造 (semantic structure)」と「意味内容 (semantic contents)」を区別している。また、Hale and Keyser (1993)は、動詞の特徴的な部分を「ヘッド (head)」と言い、それを動詞の意味構造と関連させて論じている (たとえば、動詞 *shelve* は、ヘッド *shelf* の移動 (head movement¹³) による名詞派生動詞である点を除けば、意味構造は動詞 *put* と同様である) が、これも、動詞の意味を2つの部分に分けて捉えているものと言える。

これらに基づいた場合、1つの意味クラスを形成する「状態変化動詞」は項の決定に重要な役割をする部分の意味を共有しており、それが「使役交替」という統語的現象と関連しているという説明が可能になる。

しかし、上に示した通り、状態変化動詞の中には使役交替が成立しないものもあり、ま

¹³ Baker (1988)の incorporation に当たる。

たそれに動詞と共起する名詞句の意味内容が関与している場合もある。これまでの使役交替に関する研究は、主に使役交替が成立する動詞、その中でも使役交替が成立する意味用法のミニマルペアを中心に行われてきた。そのため、使役交替が成立しない動詞や、使役交替が可能な動詞の中でも名詞によって使役交替が成立しなくなる場合については体系的に扱われていない。

それに対して本研究では、使役交替しないものも含めて「状態変化動詞」を可能な限り網羅的に取り上げ、使役交替をめぐってドイツ語の状態変化動詞が互いにどのように絡み合っているのか、また、それにはどのような意味的要因が関連しているのかを探る。さらに、動詞と名詞の組み合わせによる「事柄」のレベルで使役交替を捉えなおす。それは、動詞の語彙的意味（構造的要素の部分のみならず）と名詞の意味内容によって表される具体的な「事柄」の意味的特性が統語構造の決定に影響しているという考えに基づいている。言い換えると、動詞が形成する統語形式には、動詞の語彙的意味だけではなく、動詞の叙述対象である名詞句の意味内容も大きく関わっているという考えである。なお、ここで言う統語構造の決定（特にここでは「使役交替」をめぐって）とは、文法レベルの容認可能性だけでなく（というよりむしろ）、実際の言語使用における頻度上の傾向に基づいたものである。

このような考えに基づき、本研究では、状態変化動詞における使役交替の分析にあたり、動詞と結合する名詞句の種類やその意味内容に着目する。具体的には、各状態変化動詞において、使役的表現の目的語（〈他目〉）と非使役的表現の主語（〈自主〉・〈再主〉）に現れる名詞を抽出し、その対応の実態を調査することによって、どのような名詞の場合に使役交替が可能で、どのような名詞の場合に使役交替が不可能（すなわち、使役的用法のみが可能あるいは非使役的用法のみが可能）であるかを明らかにする。

ここで、各動詞と結合する名詞をどのようにして抽出するかという問題がある。辞書には限られた例文しか載っておらず、インフォーマントテストを用いるとなると名詞の採用が恣意的になってしまう。このような事情を含む本研究の問題提起に対し、方法論上のアプローチとしてもっとも有効なのがコーパス調査である。なぜなら、コーパスのデータは、各状態変化動詞がどのような対象の状態変化を表すのに用いられるのか、また、それぞれの対象における状態変化の出来事が使役的に捉えられているのか非使役的に捉えられているのかを、もっとも自然な形で反映しているからである。

もちろんコーパス調査は、単に動詞と結合する名詞（〈他目〉と〈自主〉・〈再主〉）を抽出し使役交替の実態を調査するための手段ではない。本研究がこういったコーパス調

査を用いるのは、むしろ、以下に挙げるような考え方に動機付けられたものであると言える。たとえば、中村 (2004: 4) では、次のような、Chomsky に対する Sinclair (1991) の批判に言及している：

『母語話者は、有限の規則で無限の文章¹⁴を生成しているのではなく、多くの場合、コロケーションに見られるように、あらかじめ定型化した表現を用いる (Idiom Principle)。』

同様に Sinclair (1991) に関連して、赤野 (2004: 10) にも次のような記述が見られる：

『語は1つ1つが互いに独立して機能しているのではなく、頻度が高く、ある程度固定し予測可能なより大きな単位の一部として機能する。言語使用者は、語と語を結合して句を作るのではなく、1つの意味を担うこのような定型句表現 (phraseology) を丸ごと選択する。』

Ptashnyk (2003: 376) でも、語結合の分析の必要性が強調されている：¹⁵

『Man realisiert in der Regel nicht, dass das Sprechen sehr häufig aus „festen sprachlichen Bausteinen“ besteht, die im linguistischen Diskurs als Kollokationen, Phraseme, Idiome, Redewendungen, oder feste Wortverbindungen bezeichnet werden. (.....) Wir verwenden beim Sprechen nicht einfach einzelne Wörter, die wir zu sinnvollen Texten zusammenführen; der Trick der Sprache besteht vielmehr in der Wiederholbarkeit ihrer Bestandteile. (発話の多くの部分が、言語学でコロケーション、決まり文句、イディオム、慣用表現、語結合と呼ばれる、「固定した言語表現」から成っていることを人々は通常意識しない。(…) 話をするとき、我々は、単に個々の単語を結びつけて、意味のある文を形成しているのではない。言語のトリックは、むしろ、その構成要素 (固定した言語表現) の反復にある)』

本研究は、いわば、コーパスのデータを用いて、各状態変化動詞が形成する具体的なコロケーションや表現パターンを抽出しようとするものであり、「使役交替」という統語的現象の実態もその一部として位置づけられる。なお、動詞の表現パターンを抽出する際には、補足成分のみならず添加成分の様々な語句も含めて観察することで、動詞の振る舞いをダイナミックに捉える。またそれらを頻度の観点から分析し、「状態変化表現」の言語運用上の特性を明らかにすることが本研究の意義の1つである。

¹⁴ 「文章」というより「文」と理解した方が適切だと思われる。

¹⁵ Ptashnyk (2003)は、ドイツ・マンハイムのドイツ語研究所 (Institut für Deutsche Sprache: IDS) にて語結合 (Wortverbindungen) をテーマに開催された第39回年次大会 (2003年3月) について報告しているもので、18本の発表の概要を紹介している。関連するものとして Steyer (2003) も挙げられる。なお、引用箇所日本語訳は筆者による。

1.4 本研究の構成

第2章では、「状態変化動詞」および「使役交替」に関連する先行研究を検討する。そして、それらの問題点、不十分な点を指摘し、本研究の方向性について述べる。

「状態変化動詞」に関しては、まず、アスペクト、動作様態の観点から「状態変化」の概念がどのように捉えられているかを見た後、(主にドイツ語)動詞の意味分類の中で状態変化動詞が具体的にどのように扱われているかを概観する。次に、状態変化動詞を1つの意味クラスとして扱っている語彙意味論の研究を取り上げるが、ドイツ語学の中ではそれに直接該当する研究が(筆者の知る限り)存在しないため、英語を対象とした研究が中心となる。

「使役交替」に関しては、派生関係に対する見方別にそれぞれの主張を整理して示す。「派生関係」は本研究で扱う問題とは直接的な関係はないが、使役交替に関してこれまでどのような議論がなされてきたかを振り返るという意味では重要であろう。

第3章では、まず、動詞の意味クラス分類に対する基本的な考え方について述べ、「状態変化動詞」とその周辺にどのような意味タイプのものであるかを概観しながら、本研究における状態変化動詞の範囲を規定する。そして、それに基づいて、辞書(Langenscheidt 1999, Duden Deutsches Universalwörterbuch 1997)の語義記述を手がかりに、幅広くドイツ語の状態変化動詞をリストアップする。

次に、リストアップした動詞について、状態変化動詞に関連する統語的現象として現在完了の助動詞選択と状態受動文形成の有無の2点に関する考察結果を示す。

そして最後に、その状態変化動詞を、使役交替の可否の観点から、使役交替が成立しない動詞と使役交替が成立する動詞に分類する。前者はさらに使役的用法のみが可能な動詞(《絶対他動詞》)と非使役的用法のみが可能な動詞(《絶対自動詞》)に、後者は非使役的用法の統語形式によって《他再動詞》と《他自動詞》に下位分類される。

第4章では、第3章で分類した「状態変化動詞」の4グループについて、それぞれの意味特性を考察し、「使役交替」の可能性および統語形式に関わる意味的要因を明らかにする。

まず、《絶対他動詞》に関して、非使役的用法が制限される意味的要因を考察し、次に、《絶対自動詞》に関して、使役的用法が制限される意味的要因を考察する。

そして最後に、それらとの対比において、使役交替動詞(《他再動詞》《他自動詞》)にどのような意味的特性が認められるかについて述べる。なお、2種類の使役交替動詞、《他再動詞》と《他自動詞》に関して、「状態変化」の意味内容的特性の相違という観点からの考察結果を示す。

第5章では、いくつかの使役交替動詞を取り上げ、実際の言語使用において使役交替がどのように展開されているのか、その実態を観察する。

具体的には、コーパス調査を用いて、各動詞の〈他目〉と〈自主〉・〈再主〉に現れる名詞の対応関係を調査する。そしてその結果に基づき、使役交替が成立する場合と、使役的表現のみ可能な場合や非使役的表現のみ可能な場合を、それぞれ事柄タイプで抽出する。第4章が「状態変化動詞」の分析であるとするならば、第5章は「名詞+動詞」が表す「状態変化の事柄」の分析であると言える。

最後に、第4章で抽出した使役交替の可能性に関わる「動詞の意味特性」と、第5章で抽出した使役交替の可能性に関わる「事柄（名詞+動詞）の意味特性」を照らし合わせ、両者の間に意味的共通性が認められることを示す。

第6章では、本研究の要点をまとめ、今後の課題および展望について述べる。

(図) 本研究の全体像 (問題提起形式)

